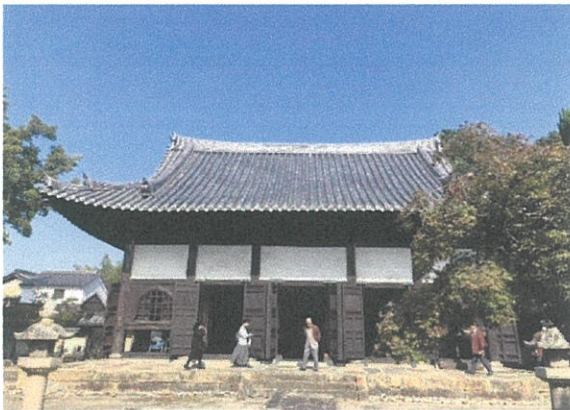


浜田の龍門寺は臨済宗妙心寺派の禅刹で、不生禅を説かれた地元浜田出身の盤珪国師の根本道場として、寛文元年(1661)に創建された。主要な伽藍の多くは盤珪国師存命中の建築で、江戸時代中期の貴重な遺構となっている。姫路市史によれば、姫路市指定文化財に指定されている建物は17棟もある。その中の一つ開山堂は伽藍の東部にある盤珪国師を祀る堂で、祠堂と昭堂(前堂)を繋いでいる。唐様でまとめられた建築としては龍門寺で唯一の遺構である。軒天井には雲の彫刻が施されるなど、正規の唐様の丁寧な建築は弟子や信者の国師への敬慕が見られる。元禄6年(1693)の春、門弟たちが寿堂(存命中に長久を祈って建てる廟堂)を建てようと造営を始めたが、国師はその完成を見ることなく9月3日朝72歳で没した。遺骨は翌年2月21日に開山堂に納められた。

開山堂は普段は門が閉ざされていて中に入ることはできないが、毎年11月2日、3日の盤珪国師の開山忌には、門が開かれ、誰でもお参りすることができる。3日の半斎^{はんさい}では、約30人の近隣の寺院から来られた妙心寺派の僧侶による法要が11時から行われた。堂の端には、一般の参列者のための椅子も設けられている。30人の僧侶が一行に並んで、経を唱えながら堂の中を廻るのは庄巻である。最後は河野太通老大師を先頭に僧侶による焼香が行われて約1時間の法要が終わった。一般の参列者もその後で焼香をすることができる。昭堂の奥の祠堂には、延宝年間(1670年代)に盤珪国師が自ら作られたとされる頂相像が安置されており(『龍門志略』)、その右側には、元文5年(1740)桜町天皇より国師号を拝受された時のご宸翰が掲げられている。

没後 330 年を経て今なお多くの地域の人々の尊崇を集めている国師の人柄が偲ばれる開山忌である。

網干歴史講座会員 浜田 中川千里



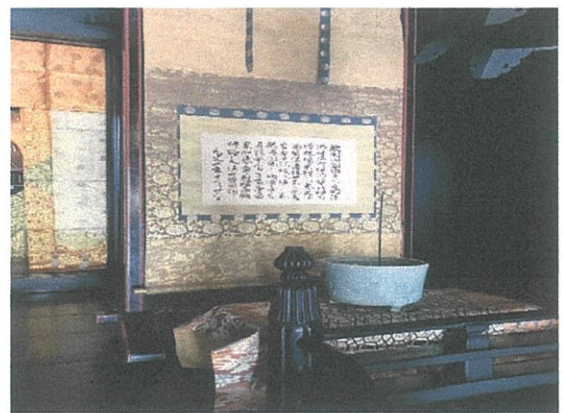
・開山堂正面



・開山堂内部



・国師自作とされる頂相像



・桜町天皇のご宸翰